

編 集 後 記

ついこの間日本医学会総会が終わったと思ったらもう夏を迎える。おまけに今年はずいぶん早くから猛暑が訪ずれ水不足の声も聞かれるようである。

本号では胃切除後の種々の問題がとりあげられている。近年早期胃癌などの手術症例が増して、全く自覚症状のない患者に広汎な胃切除を行なう機会が増加している。また胃、十二指腸潰瘍の手術も極めて安全な手術となり、むしろ特に大きな手術とは考えられないような時勢になっている。こういう時に胃切除後の種々の問題を改めて認識することは有意義なことと思う。今年の春の総会でも胃切除後の問題がとりあげられており、この問題は今後その重要性が増してくるものと思う。胃切除後のダンピング、血清肝炎、術後消化性潰瘍、癌の再発、術後胃炎等多くの問題が含まれているが、これらは大いに検討されその対策も研究されなければならない。

本号の綜説では残胃炎、術後消化性潰瘍、吻合部の術後の経過、胃断端癌等の問題が近年の検査法の進歩を反映して精しい検討が可能になったことを示しており、これらの成績がやがて治療面に大いに役立つであらうという期待をいだかせる。

技術解説の病理標本の作り方は胃疾患の病理組織的なうらづけの重要性が改めて認識されてきた今日諸家に役立つであらうと信ずる。

本号ではテーマにふさわしく日本医学会の長老であり、また消化器外科の権威である福田保先生の「外科学界の今昔を聞く」の訪問記が掲載されたのは大へん時宜をえたまた嬉しいことである。おわりに皆様方に本誌に対する御希望、御忠告をお寄せいただきたいと考えます。本誌をますます皆様に愛される雑誌としたいと考えております。

< 城 所 仸 >